

NEWS LETTER



株式会社人財アジア 定期ニュースレター

vol.35

☐ 岡村の最近の注目ニュース ☐ ビジネス予備校近況リポート ☐ B-EAT 会活動報告 ☐ What's up?

2024 年 09 月

会社経営も国家統治も 最後は民意の反映の結果だ。

2024/09

だからこそ我々は、老若男女問わず、一人ひとり自ら考えなければならない。

アメリカ大統領選の度に思い出すのは、2000年、米国NYに住んでいた時のことだ。当時中学校二年生の娘と小学校五年生の息子は、開票日に学校から与えられた宿題に頭をひねっていた。中二は、共和党と民主党のどちらを支持するか？理由とともに記せ、という大人の課題だった。小五は、米国の州別地図を赤と青、勝者の色で塗っていくというかわいい課題であった。ただ、フロリダ州の開票結果が歴史的僅差で確定しなかったため(最終的に訴訟)、深夜まで粘ったあげくに塗り絵を完成できぬまま眠りに落ちた。20年以上経ったいまも、家族でたまに話題になる。米国の街中で通行人がインタビューされると、誰もが胸を張って政治(≠政局)を語る姿勢は、かような長い政治教育に培われたものなのだ。

世界的選挙イヤーなので、政治を語ることにシャイな日本ですら、若手研修で話題に上ることがある。日本という国が盤石であった時代には、ノン・ポリティックスも一つの選択だった。不確実性の増大に連れて、日本丸という船が心もとなくなってきたから、老朽化していないか？故障はないか？点検するのは自然な流れだろう。

私は、今回の自民党総裁選を2つの点で注目している。

一つは、急遽争点にあがってきた**解雇要件の緩和**だ。

テクニカルには色々な問題が指摘されているがとてもシンボリックな話だ。中西元経団連会長、トヨタ社長等が数年前から語り始めた終身雇用の瓦解について、遂に政治の場でもオープンに議論されるのが感慨深い。日本の大企業においては、実際に解雇にまでいたるのは特殊な事例であり続けるであろう。それでも、いったん入社したら生涯安泰！という会社と社員の情緒的關係に一石を投じ、徐々に、互いを見極め選択しあう冷静な契約関係への変質を促すことになるはずだ。

解雇の代償が、金銭的補償か、リスキリングや就職支援かで意見が分かれている。雇用の非流動性が、衰退産業内の人財滞留を招き、成長産業への人財循環を阻んできた。今回の議論をきっかけにリスキリング教育が推進されることで、日本の生産性が上昇に転じる糸口となる。

蛇足ながら、2000年初頭、日本経済が低迷する中で、非正規雇用の導入によって、正規雇用者の権利が守られた。“もしも”解雇要件が緩和されたら、全員が再び同じ土俵に立って実力主義で競い合う環境回帰への第一歩にもなりえるのではないか。

もう一つは、**総裁候補の若年化**だ。米国ではかつてはオバマ氏やクリントン氏などの若手大統領が存在したが、いまや候補者の高齢化が進み、60代すら若手に見える。一方で、かつて年配者で占められた日本の候補者は、いまや40代が複数おり、60代では新鮮味なくうつる。

多様性の時代、年齢も個性を彩る要素の一つに過ぎない。年を重ねれば、経験が増し深慮を手に入れる一方で、努力しないと新しい技術への関心や変革の心が減じがちだ。年齢の高低自体に良し悪しはない。肝は、いま求められている日本の変革にどちらがよりふさわしい要素か？ということだろう。蛇足だが、年功呪縛から脱し若手も活躍する様は、日本の価値観の広がりや確実な進化を感じさせてくれる。

会社経営も国家統治も最後は民意の反映の結果だ。だからこそ我々は、老若男女問わず、一人ひとり自ら考えなければならない。そうすれば、傑出したリーダーが折角旧弊をぶっこわしても、保守的な後継者が逆戻りさせる過去の失敗パターンから今度こそ抜け出せるだろう。

今回で多忙の中ご執筆くださった水波氏は、60代になってマダガスカルの応援に乗り出した。ご自身曰く、それほど金額でもない賞金でも、貨幣価値が異なるマダガスカルではとても感謝される。同氏の50代からの生き方に勇気を貰う人財は多い。私も大いに励まされている。

「50 歳からが本当の人生」

一般財団法人水波アフリカ財団
理事長

水波 悟 氏



大雑把に、サラリーマンに向いている人と向いていない人に分けるとすれば、私は後者です。お酒は飲めない。ゴルフはしない。人と群れるのは嫌い。自分が納得したことには熱中できるが、納得できないとやらない。おかしいと思えば上司だろうと意見する。要は、マイペースで理屈っぽく、扱いにくい部下だったと思います。金融機関で、日本株のアナリストという専門的な仕事をしていて、仕事に不満はありませんでしたが、所詮、会社の中では傍流です。さりとして、社内でも他にやりたい仕事もなく鬱々としていました。

45歳のとき証券会社に転職して、アナリストとしてやっていく自信はつきました。ただ、アナリストも会社にも所属するサラリーマンの仕事です。賞味期限はあと10年くらいかなと少し寂しく思っていました。

そう思っていた50歳の頃、山田博夫先生がある雑誌に寄稿されていた「50歳は人生の中間点」という記事が目にとまりました。

人生を80年として最初の20年は子供の期間で、大人としては60年。60年を前半、後半に分けると、前半の30年は受け身の人生。組織の中では上司の指示で会社のために働き、私的には家族や育児のために働く「誰かのための人生」です。そして50歳からの後半の30年が本当の人生で、仕事の面では何をすべきかを自分で考え、私的には子育てから解放される「自立的で能動的な人生」です。後半の人生こそ、本当にありたい理想の自分を追求できるのだと述べられています。

私はこの記事に勇気をもらいました。税理士の資格を持っていたので、会社に出して、富裕層向けのアドバイスをを行う部門に異動させてもらいました。そして、子育ての目処がついた56歳のときに税理

士法人を設立し独立しました。これが正解でした。全て自分で判断できるのでストレスはありません。創業時はたいへんでしたが、人の意見は聞かない性格なので、経営がぶれることもありませんでした。

独立起業したのは金儲けだけが目的ではなく、社会で自分の能力を試したかったからでもあります。結果が出たところで会社は別の税理士法人に譲りました。

今は、水波アフリカ財団という財団を作って、マダガスカルでビジネスコンテストを行い、賞金を出してスタートアップ企業の支援を行っています。人生の最後は、少しは社会に貢献したいと思ったからです。

私と同様、前半の人生、思うに任せない人もいると思います。サラリーマンなんて向いてないけど、学卒時に起業・独立するほどのお金も自信もなかったし、今は家族の生活があるので思い切った決断はできないという人もいます。しょう。受け身の仕事ばかりでストレスが溜まっている人も多いと思います。

焦ることはありません。50歳からが本当の人生です。何者にも縛られない自立的で能動的な人生は50歳からです。後半の人生に向けて、本



当は何をしたいのかを整理し、今できることから少しずつ準備すればよいと思います。後半の本当の人生を楽しむ実りあるものにしてください。

What's up?



藤中 貴善

EAT ビジネス予備校
福岡クラス (7 期生)
リックス株式会社
グローバル営業本部
海外営業部

グローバル人材になりたいという気持ちから EAT での「炎の研修」の受講を決め、1 年間貴重な勉強をさせて頂きました。卒業してすでに 4 か月が過ぎました。EAT 卒業と同時に総務部から海外営業部に異動し、国内外の出張が増え、出会いが多くなりました。デンマークとフィリピンには初めて出張し、商談の会話内容で自分も成長したと実感できています。EAT のメンバーと再会して、熱い話をすることを楽しみにしています。



株式会社人財アジア

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-8-3 丸の内トラストタワー本館 20 階

[TEL] 03-6300-6460 [Mail] info@eat-star.asia

特別寄稿および What's up? に掲載して下さる方を募集しています。ご希望の方は事務局までお問い合わせのほど、お願い致します。